

【一】次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

わたしたちが見たり聞いたりしたものを言葉で表そうとして、うまくいかないという経験は多くの方がもっておられるのではないのでしょうか。

たとえばわたしたちは自分の気持ちを「はればれとした」とか「うきうきした」といったことばで言い表したり、お茶の味を「まろやかな」とか、「うまみがある」といったことばで表現したりします。しかしそのような表現で、自分の実際の感情や、お茶の味を十分に言い表すことができるのでしょうか。

たとえば「まろやかな」という表現を、「味が穏やかで口あたりがよい、そして深い味わいが感じられる」といった言葉で説明することはできます。しかしその①「深い味わい」がどのような味わいなのかをさらに説明しようとする、言葉に窮することになります。

言葉は、たしかに、わたしたちが経験するものの一面を言い表し、他の人に伝えます。しかしそれはわたしたちが実際に経験していることの一部でしかありません。言葉による表現は、経験の具体的な内容がある断面で切り、その一断面で経験全体を代表させることに喩えられるかもしれません。その一断面からあらためて経験の全体を眺めたとき、両者のあいだに大きな隔たりがあります。そのあいだには無限な距離があるとと言ってもよいでしょう。

「言葉」の語源は、「言の端」であつたと言われます。古くは「事」と「言」とは通じるものと考えられていました（言葉には、そのなかで言われているものを具体化する霊的な力が宿っているという、②いわゆる言霊思想はそこから生まれたものでした）。しかしやがて「事」と「言」とは同じではないということに人々は気づくようになりました。言葉は「事Ⅱ言」として事柄全体を言い表したのではなく、そのほんの一端を言い表したものにすぎないということが意識されるようになったのです。そのために「言の端」という言い方がされるようになったのだと考えられています。

言葉がそのまま経験であるとは言えないのは、それがわたしたちの具体的な経験を普遍的な概念によってひとくくりにしてしまうことと関わっています。^{*}Ⅰ先ほど、言葉は個々のものを類に分けていくという働きと深く結びついていると言いました。類に分けるというのは、それらを、その共通する特徴によってひとまとめにすることにほかなりませんが、③それは個々のものももっている違いを無視することでもあります。

「Ⅰ」^{*}Ⅱ桔梗の青、露草の青、都忘れの青、それぞれの青は独特の色合いをもっていますが、言葉はその違いを無視して、それらすべてを同じ「青」ということばで表現してしまいます。そのことによって、個々のものももっていた^aビミョウな差異は一挙に背後に退いてしまいます。

言葉は、それぞれ独自のニュアンスをもっていたものを、^bキセイの枠組み、言わば^{*}Ⅲ鋳型のなかに押し込んでいくという役割を果たしていると言っ

てもよいかもしれません。わたしたちがそのときどきに抱く感情も、決して一つのことばで表現できるような単純なものではなく、さまざまな相がそこには絡まりあっています。また固定したものではなく、大きな振幅をもちながら、止むことなく動いていきます。言葉はその動きの振幅を削りとって、それをたとえば「悲しい」とか「寂しい」といった一つのことばで表現するわけですが、そのことによって④感情のもつともいきいきとした部分がことばの影に隠れてしまうのではないのでしょうか。

言葉によってわたしたちは多くのことを知り、多くのことを考えるわけですが、そこには^cセイヤクもまたあるように思います。枠組みのなかに入らないものはとらえることができないわけですし、その枠組みに取り込まれたものは、その枠組みにあうように変形させられてしまいます。これは、言葉にどこまでもつきまとう根本的なセイヤクであると言っていてよいでしょう。

それだけでなく、言葉は、この枠組みでとらえられたものが、もの自体であり、ものごとはそれによって正確にとらえられているという意識を、それを使う人のなかに生みだします。そういう意味で言葉自体が^{*}Ⅳプラトンの言う洞窟の一つであると言えるかもしれません。しかし洞窟のなかに座って前方しか見ていないと、自分がそもそも洞窟のなかにいることにまったく気づかないということが起こるのです。

「Ⅱ」言葉はこの具体的な経験とのあいだにある隔たりを乗り越えることができるのでしょうか。

言葉にはまず、先に述べたような、ものをグループ分けする働き、つまりカテゴリー化する働きがあります。ここでは、いま目の前にしているリング、たとえば^{*}Ⅴ紅玉の独特の赤い色とか、それ特有の甘酸っぱい味、あるいはそれが私の好みであるとかいったことは問題にされません。むしろリングに共通の性質ですべてのものをひとくくりにすることがその場合の⑤唯の関心事です。

しかし、たとえば友人に「紅玉はおいしいよね」と語ったとき、この「紅玉」ということばは、その基礎的な意味を相手に伝えるだけでなく、相手がある味を知っている場合には、その人のなかに、紅玉独特の強い酸味のきいた甘さをありありとイメージさせることができます。それを言葉の喚起機能と呼んでよいと思いますが、わたしたちは、「紅玉」ということばを聞いたとき、その音声越しに基礎的な意味を聞くだけでなく、さらにその意味を越えて、このことばがもつ豊かな意味あいをも聞くことができるのです。⑥ここに鍵があります。

たしかに、わたしたちはいくらことばを重ねても、紅玉のビミョウな味をことばで表現し尽くすことはできません。そこに言葉の限界があります。「Ⅲ」他方、いま言った機能によって、その味を直接相手のなかに喚起することができます。そのような働きがあるからこそ、わたしたちの会話は、

平板な意味のやりとり終始せず、いきいきとしたものになるのだと言えるのではないだろうか。

(藤田正勝『はじめての哲学』より)

(注) *₁ 先ほど……本文より前の部分で筆者は言葉の働きについて述べている。

*₂ 桔梗・露草・都忘れ……すべて植物の名。

*₃ 鋳型……溶かした金属を流し込む型。

*₄ プラトン……古代ギリシャの哲学者。

*₅ 紅玉……リンゴの品種。

問一 傍線部③④について、カタカナは漢字に直し、漢字はその読みをひらがなで書きなさい。

問二 空欄Ⅰ～Ⅲに入る語句として、最も適切なものを選び、記号で答えなさい。

ア さて イ そして ウ だから エ しかし オ また カ たとえば

問三 傍線部①『深い味わい』がどのような味わいなのかをさらに説明しようとする、言葉に窮することになります。」とあるが、なぜことばに窮することになるのか、三十五字以内で答えなさい。

問四 傍線部②「いわゆる」と同じ品詞の語を、次のア～エの傍線部の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 駅に着くと、すでに彼はいなかった。

イ その町には、きれいな湖がある。

ウ 正月の神社は、たいした人出だ。

エ 食後に冷たい飲み物を注文する。

問五 傍線部③「それ」の指している内容について、十字以内で答えなさい。

問六 傍線部④「感情のもっともいきいきとした部分」とは感情のどのようなところを捉えて言ったものか。文末が「　　ところ。」になるように四十字以内で答えなさい。

問七 傍線部⑤「ここに鍵がありそうです。」とあるが、何が鍵となつてどのようなことが可能になるのか。それを説明した次の空欄A・Bに入る言葉をそれぞれ指定された字数以内で答えなさい。

○ (A 二十五字以内) が鍵となつて、(B 二十字程度) ことが可能になる。

【二】次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。なお、本文に登場する宇佐美佑は、視覚支援学校に通う中学一年生である。

二学期からスタートした、動物の骨を観察する授業。松木先生がいうには、二学期のあいだに十六種類もの動物の頭蓋骨を観察したそうだ。草食動物もいれば肉食動物もいたし、小型動物もいれば大型動物もいた。

三学期に入った今、観察の対象は全身骨格となった。A、先週から観察している動物の正体は、今回もまた明かされていない。松木先生は「名前を知ると、それだけで知った気になってしまいうでしょう」といって、いつだって、簡単には教えてくれないのだった。

本日の授業は、松木先生のこんな問いかけからスタートした。

「先週は、背骨を④ジクに身体ができていることを確認しました。今日は、胸部と腹部に着目します。どうして、胸部は肋骨でおおわれているのでしょうか？」

「心臓があるから」

真つ先に答えた桜井のあとに、

「あと、肺も」

栗田がつけたした。

「B 心臓と肺は、どういう臓器だといえる？」

「大事な臓器！」

これは、光くんだ。

「じゃあ、その大事な臓器に対して、肋骨はどんな役割をはたしているのかな？」

「守ってる？」

そこでようやく、佑も発言した。

入学当初とくらべたら自発的に発言しているつもりだけれど、桜井の瞬発力にはかなわないし、光くんのような堂々つぶりもない。栗田みたいにムダ

口をたたく余裕だってない。ただし、最近は、①それが自分のような気がしている。

松木先生は「宇佐美くん、正解！」といった。

「だけどさ、大事な臓器があるのは胸部だけかな？ どうして、腹部は肋骨で守られていないんだろう？」

佑たちはその答えを、骨格標本からさぐることにした。

ふたり一組で観察できるようにと、実験台ごとに一体の骨格標本が用意されている。佑は桜井といっしょだ。

佑が両手をのばしたところで、「宇佐美くんは、すっかり②上手に見られるようになったね」と、松木先生の春めいた声がかえった。

そういえば、一学期は片手でばかり見ていたっけ。両手を使うようになったのは、松木先生が口にした「両手を使えば、世界が広がる」の意味がわかったからだ。

ということとは、今や、ぼくは、二倍に広がった世界を生きているといえるのかもしれない。いや、ちがうぞ。植物からはじまった生物の授業は、昆虫、動物の頭蓋骨、動物の全身骨格と、観察の対象がどんどん広がって、この世界に存在している生きものたちの⑤リンクをひとつずつなぞってきたも同然だ。中には、「生」だけでなく「死」もあった。

だとしたら、ぼくは、二倍以上に広がった世界を生きているといえるんじゃないのかな？

そんなふうに結論づけるや、佑の心にすがすがしい風が吹きよせた。最近ほ沈みがちだった気持ちが晴れわたる。

松木先生はふたつの実験台のあいだに立つと、こんなふうに切りだした。

「そうしたら、全員立って。自分の背骨を、曲げたりそらせたりしてみよう」

松木先生のひと声で、佑たちは椅子から立ちあがった。

まずは前屈して、背中や腰が曲がる感覚を味わう。今度は反対側へ、ぐいんと背筋をそらせる。

「C、腹部にも肋骨が存在していたら、今の動きはどうなる？」

松木先生の質問に、光くんが大きな声で「不可能！」と即答した。

松木先生は、四足歩行の動物は、空中で背を曲げることで前足と後ろ足を近づけて、背をそらすことで遠ざける、という動作を高速でくりかえすことで、より速く走ることが可能になる、と教えてくれた。

佑は、さっきまでさわっていたなどの動物Xが、この広い世界をさつそうと走っていく姿をイメージした。その後、踵の位置や、肘と膝の角度、手のひらをどんなふうに地面に接地させているかなど、細部を観察していると、授業終了のチャイムが鳴った。あつというまの二時間だった。

「楽しかったな」

知らず知らずのうちに、笑みまでこぼれていたらしい。松木先生に「宇佐美くん、すっごくいい顔してるよ」といわれてしまった。さわっているのは死んだ動物の骨なのに、その向こうにある臓器や筋肉、D生きていたころの◎セイタイを推測するところがおもしろかった。そういう意味では、*晴眼者と対等といえるんじゃないだろうか？ 目が見えるからといって、何もかもを見晴らせるわけではないだろう。佑たちも、じっくりと手でさわることで、見えてくるものがある。イメージすることで、広がっていく世界がある。

松木先生に伝えようとしたけれど、きちんと言葉にするのが照れくさかった。

「推測するのがおもしろいから、骨の授業は大好きです。感想は提出用のノートに書きます」

佑が逃げるように早口で話すと、③松木先生がおかしそうに笑った。

「楽しみにしています」

春といっても過言ではない、おだやかな声だった。

（樫崎茜『手で見るぼくの世界は』より）

（注）*晴眼者……視覚障がい者の側から言う語で、目の見える人のこと。

問一 空欄A～Dにあてはまる接続語として適切なものを、次から一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア はたまた イ つまり ウ もし エ だから オ ただし

問二 波線部①～③のカタカナを漢字に直しなさい。

問三 傍線部①「それが自分のような気がしている」とあるが、ここには佑のどのような気持ちが表れているか。「それ」の内容が具体的に分かるように、五十字以内で答えなさい。

問四 傍線部②「上手に見られる」とはどういうことか、本文全体をふまえて、五十字以内で答えなさい。

問五 傍線部③「松木先生がおかしそうに笑った」とあるが、なぜ笑ったのか、五十字以内で答えなさい。

問六 二重傍線部「松木先生の春めいた声がきこえた」、「春といっても過言ではない、おだやかな声だった」という表現についての説明として、最も適切なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 春という季節のイメージと結びつけることで、松木先生のおだやかな性格が表現されている。

イ 生徒との交流を楽しむ松木先生の華やいだ声が、今の季節に重ね合わせて表現されている。

ウ これから楽しいことが始まるのではないかと佑の高揚する気持ちが表現されている。

エ 声音で相手の心情を感じとっている佑のイメージする世界が、巧みに表現されている。

オ 声を季節のイメージで捉える佑を描くことで、自然と共に生きる佑の姿が表現されている。

【三】次の本文を読み、後の問いに答えなさい。

昔、延喜^{えんぎ}のみかどの御時、五条の天神のあたりに、大きな柿の木の実ならぬあり。その木の上に仏現れておはします。京中の人こぞりて参りけり。
(一人残らず)

馬、車も立てあへず、人もせきあへず、①^①拌^ひみののしりけり。

(騒いでいた)

かくする程に、五六日あるに、右大臣殿心得ず思し給ひける間「まことの仏の、^{*1}世の末に出で給ふべきにあらず。②^②我行きて試し^しみん」と思して、

(私が行って試してみよう)

^{*2}日の装束^{さうぞく}うるはしくして^{*3}檳榔^{びりやう}の車に乗りて、御先多く具して、集りつどひたる者ども退^のけさせて、車かけはづして^{*4}楊^{しち}を立てて、A^{こずゑ}

(馬に乗って先導する者を大勢引き連れて)

を目もたたかず、あからめもせずしてまもりて、一時ばかりおはするに、この仏、しばしこそ花も降らせ、光を放ち給ひけれ、あまりにあまりにまも

(まばたきもせず)

(脇目もふらず見守つて)

(二時間くらい)

られて、③しわびて、大きな^{とび}鶯^うの羽折れたる、土に落ちて惑ひふためくを、童部^{わらは}ども寄りて打ち殺してけり。大臣^{おとど}は「さればこそ」とて帰り給ひぬ。

(思った通りだ)

さて、時の人、「この大臣を④いみじくかしこき人にておはします」とそののしり(Ⅰ)。

(当時の人)

『宇治拾遺物語』より)

(注) ^{*1}世の末・・・末世(仏法が衰え、修行もすたれた末の世)

^{*2}日の装束・・・正装

^{*3}檳榔の車・・・牛車(ぎつしゃ)の一種

^{*4}楊・・・牛車に付属する道具の名・牛の踏み台

問一 傍線部A「こずゑ」を現代仮名遣いに直しなさい。

問二 (Ⅰ)に入る語句を次の中から選び、記号で答えなさい。

ア けら イ けり ウ ける エ けれ

問三 傍線部①「拌み」とあるが、人々はどこに現れる、何を拌んでいるのか。三十五字以内で答えなさい。

問四 傍線部②「我行きて試しみん」とあるが、何を「試そう」と思ったのか、十五字以内で答えなさい。

問五 傍線部③「しわびて、大きな鶯の羽折れたる、土に落ち」とあるが、それはなぜか。最も適切なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 鶯が、五、六日前に羽を怪我して、飛んで逃げることはできなかったから。

イ 鶯が、大勢に注目されていることに気づき、目立ちたいと考えたから。

ウ 鶯が、自分自身の命が尽きるのを感じ、最後に姿を現そうと考えたから。

エ 鶯が、大臣の着ている装束をきれいだと感じ、近くで見えたかったから。

オ 鶯が、大臣の眼光に長時間耐え、化け続けることができなくなったから。

問六 傍線部④とあるが、「時の人」が「いみじくかしこき人」と評価したのはなぜか。民衆と大臣を比較して四十字以内で答えなさい。

解答用紙

受験番号

名前

[illegible]

二									
問六	問五	問四	問三	問二	問一				
				㉓	A				
					B				
				㉔	C				
					D				
					㉕				

[illegible]

[illegible][illegible]

三					
冊一	冊二	冊三	冊四	冊五	冊六
こすえ	ウ	五	き	仏	民
		条	な	が	衆
		の	柿	本	は
		天	の	物	歳
		神	木	か	、
		の	の	ど	大
		あ	上	う	臣
		た	に	か	は
		り	現	と	偽
		に	れ	い	物
		あ	る	う	だ
		る	。 仏	こ	と
		、	実	。	破
		の	な		つ
					た
					か
					ら
			な		。
			い		さ
		大			れ
					て

受験番号	
名前	